どうやま　　かみかわら

堂山遺跡・上川原遺跡

県道大和田森線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書

２００１

掛川市教育委員会

例　　言

1．本書は、平成11年度に発掘調査、平成12年度に整理調査を実施した静岡県掛川市原里に所在する堂山遺跡、寺島に所在する上川原遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、県道大和田森線道路改良工事に伴う緊急発掘調査で、静岡県袋井土木事務所を委託者とし、掛川市を受託者とし、掛川市教育委員会が実施した。

　調査に係る費用は、静岡県袋井土木事務所が負担した。

3．発掘調査に際し、周辺土地所有者の方々、地元地区の方々には多大な御理解と御協力を頂いた。

4．発掘調査・整理調査、本書の執筆・編集は、掛川市教育委員会の前田庄一が担当した。本書に掲載した石器の実測・トレースは、松井一明氏（袋井市教育委員会）にお願いした。

5．現地調査における遺構土層断面図作成・遺構平面図作成・発掘調査支援を、株式会社静岡人類史研究所に、堂山遺跡の空中写真撮影を株式会社イビソク静岡営業所に委託した。

　堂山遺跡から出土した炭化材・種子の同定を、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

6．現地調査ならびに本書作成にあたり、次の方々から御教示と御協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

　柴垣勇夫教授・向坂鋼二氏・篠原修二氏・佐藤由紀男氏・松井一明氏・竹内直文氏

7．調査の記録は、掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．挿図における方位は、座標の北である。

2．挿図における高さは、標高である。

3．本書で使用した遺構名称は、次の意味である。

　ＳＢ：竪穴住居跡　　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＨ：掘立柱建物跡　　ＳＫ：土坑

　ＳＰ：柱穴状遺構　　ＳＸ：性格不明な遺構

4．本書で使用した遺構番号は、ピット番号を除き、現地調査時とは変更してある。

5．遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目　　次

Ⅰ　堂山遺跡　発掘調査と遺跡の概要 ---------- 2
1．調査にいたる経緯と調査の目的 ---------- 2
2．調査の方法と経過 ---------- 2
3．遺跡をめぐる歴史的環境 ---------- 2
Ⅱ　調査の内容 ---------- 5
1．遺構 ---------- 5
2．遺物 ---------- 6
Ⅲ　上川原遺跡　発掘調査と遺跡の概要 ---------- 14
1．調査にいたる経緯と調査の目的 ---------- 14
2．調査の方法と経過 ---------- 14
Ⅳ　調査の内容 ---------- 14
1．遺構と遺物 ---------- 14
Ⅴ　まとめにかえて ---------- 14
附載 堂山遺跡から出土した炭化材樹種・種実遺体の同定について ---------- 16

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図 ---------- 1
第２図　遺構全体図 ---------- 3
第３図　ＳＢ０１・ＳＢ０２実測図 ---------- 7
第４図　ＳＢ０３・ＳＢ０４・ＳＢ０５実測図 ---------- 8
第５図　ＳＤ０１・ＳＤ０２・ＳＤ０３・ＳＤ０４実測図 ---------- 9
第６図　ＳＫ０１・ＳＫ０２・ＳＰ３１・ＳＰ６５・ＳＰ６６実測図 ---------- 10
第７図　ＳＨ０１・ＳＸ０１・ＳＸ０２実測図 ---------- 11
第８図　出土土器類実測図 ---------- 12
第９図　出土石器類実測図 ---------- 13
第10図　完掘実測図及び出土遺物実測図 ---------- 15

図　版　目　次

図版Ⅰ　上　堂山遺跡全景
　　下　ＳＫ０１遺物出土状況（西から）
図版Ⅱ　上　ＳＤ０１出土古式土師器壺
　　下　ＳＫ０１出土白磁碗
図版Ⅲ　上　ＳＢ０１全景（西から）
　　中　ＳＢ０２全景（南から）
　　下　ＳＢ０３全景（南から）
図版Ⅳ　上　ＳＤ０１～０３全景（西から）
　　中　ＳＨ０１全景（北から）
　　下　ＳＫ０１検出状況（東から）
図版Ⅴ　上　ＳＫ０２全景（東から）
　　中　ＳＰ３１石器出土状況（北から）
　　下　ＳＰ６６砥石出土状況（北から）
図版Ⅵ　　出土土器類（１）
図版Ⅶ　　出土土器類（２）
図版Ⅷ　　出土石器類
図版Ⅸ　　堂山遺跡炭化材樹種・種実遺体同定資料（１）
図版Ⅹ　　堂山遺跡炭化材樹種・種実遺体同定資料（２）

1. 堂山遺跡　2. 上川原遺跡　3. 宮ノ段遺跡　4. 知見寺遺跡　5. 西開戸遺跡　6. 鳥淵遺跡　7. 寺ノ段遺跡
8. 栃原城跡　9. 大門遺跡　10. 花ノ木沢遺跡　11. 中瀬遺跡　12. 小谷沢遺跡　13. 和田遺跡　14. 大縄遺跡
15. 上ノ段遺跡　16. 高山城跡　17. 松下遺跡　18. 萩遺跡　19. 萩ノ段遺跡　20. 萩ノ段Ⅱ遺跡
21. 萩ノ段古墳　22. 平Ⅰ遺跡　23. 平Ⅱ遺跡　24. 平Ⅲ遺跡　25. 平古墳群　26. 次鎌遺跡　27. 雨垂遺跡
28. 上ノ平遺跡　29. 明神山古墳群　30. 寺田館跡　31. 原遺跡　32. 丁ノ坪遺跡

第1図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

Ⅰ　堂山遺跡 発掘調査と遺跡の概要

１．調査にいたる経緯と調査の目的

堂山遺跡は、市内原里字堂山に所在する遺跡で、戦前、地元の仲屋栄一氏が有舌尖頭器を表採したところとして知られている。

市内北西部の寺島地区から大和田地区にかけて県道大和田森線を改良する計画が、県袋井土木事務所掛川支所から、平成10年10月２日に掛川市教育委員会に示された。そこで、平成10年度に計画路線内に所在する７遺跡について、平成11年１月25日から３月25日まで掛川市教育委員会が確認調査を実施した。この結果、堂山遺跡と上川原遺跡において埋蔵文化財の所在が確認された。平成11年３月２日に、上川原遺跡の発掘調査について、県袋井土木事務所掛川支所・県教育委員会文化課・市教育委員会文化課が協議し、平成11年度に発掘調査を実施することとなった。さらに、平成11年４月13日に、堂山遺跡の取り扱いについて協議を行い、上川原遺跡と同じ時期に発掘調査を実施することとなった。

２．調査の方法と経過

堂山遺跡の発掘調査は、平成10年度の確認調査で埋蔵文化財が確認された1,644㎡を対象とした。現地調査においては、地形に則し基準ラインを設け、一辺10ｍのグリッドを設定した。南北方向の基準ラインは、座標の北から41度30分西に振れている。グリッドの名称は、東から西に１から10まで、北から南にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄとし、１Ａ区、２Ｂ区などと呼称した。図面は、平面図を20分の１と10分の１の縮尺で、土層断面図は20分の１の縮尺で作成し、遺構全体図を100分の１の縮尺で作成した。

写真による記録は、ブロニー白黒フィルム、35㎜カラーフィルム・リバーサルフィルムによった。

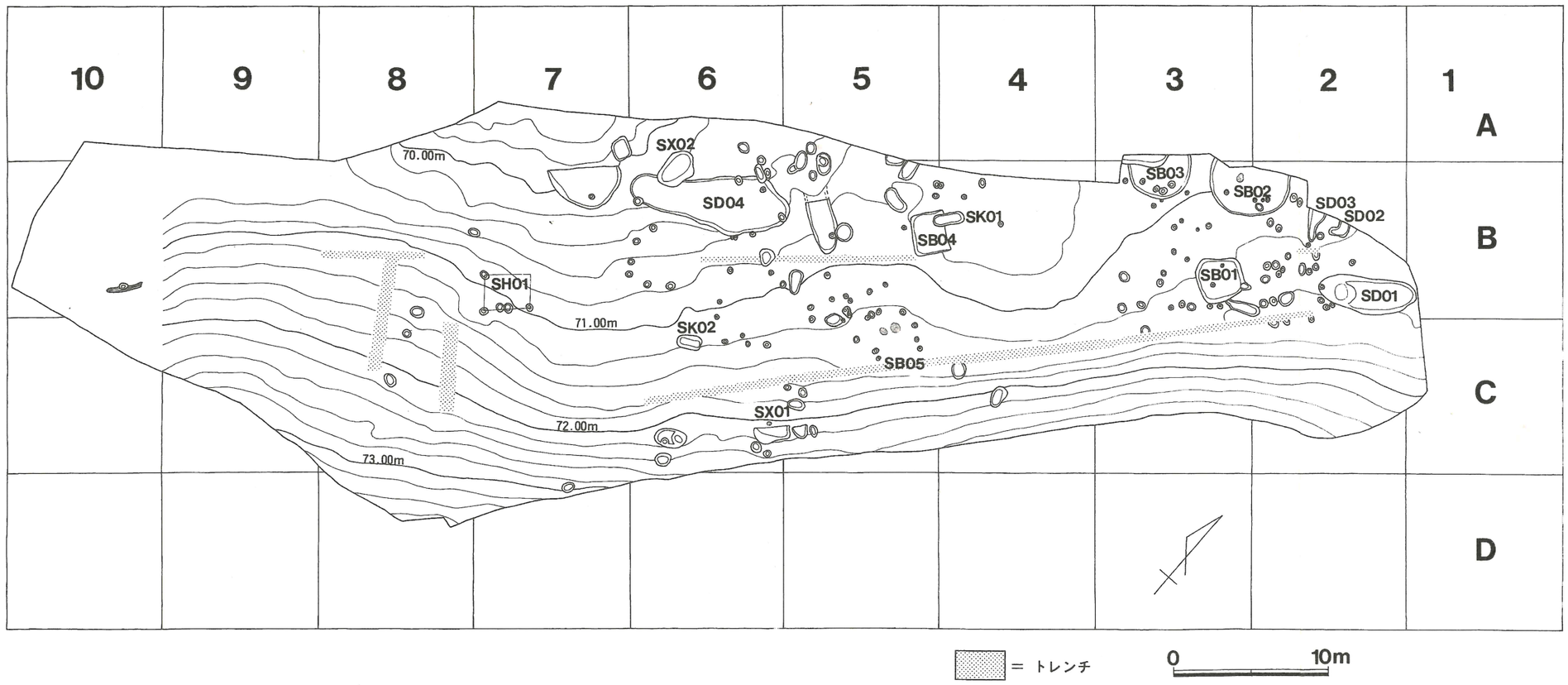
以下、作業の経過を概述する。

平成11年７月14日～９月１日	調査区東半（１～６のグリッド）精査・掘削、図面作成・写真撮影
９月２日～９月21日	調査区西半（７～９のグリッド）精査・掘削、図面作成・写真撮影
９月27日	ラジコンヘリコプターで空中写真撮影
平成12年２月15日～３月17日	ＳＢ02・03、ＳＤ04、ＳＫ01・02の土を洗浄

３．遺跡をめぐる歴史的環境

堂山遺跡周辺では、萩ノ段遺跡が昭和52年に掛川市教育委員会により調査され、縄文時代早期の押型文土器、中期から晩期にわたる土器・石器、弥生時代中期・後期の土器が出土している。また、上ノ段遺跡は、本格的な発掘調査は実施されていないが、以前から石鏃が採集されるところとして地元で知られている。この遺跡からは、縄文時代中期から晩期にかけての土器、鰹節形大珠、石斧、石剣、石棒、土偶片などが採集されている。

近年、第二東海自動車道の建設に伴う発掘調査により、今まで遺跡の存在が知られていなかった原野谷川左岸の河岸段丘面から縄文時代の遺跡が、右岸の段丘面からも縄文時代から古墳時代にわたる集落跡が発見されている。


10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
A
B
C
D
70.00m
71.00m
72.00m
73.00m
SX02
SD04
SK01
SB04
SB03
SB02
SD03
SD02
SB01
SD01
SH01
SK02
SB05
SX01
= トレンチ
0
10m

第2図　遺 構 全 体 図

Ⅱ　調査の内容

今回の調査地の大半は、茶畑になっていたところである。戦前に有舌尖頭器が採集された遺跡であり、また、確認調査により、弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられる土器片が出土したことから、これらの時期の遺構の存在が予想された。現地調査に入ると、茶畑部分の遺構の残存状況はきわめて悪く、主要な遺構は縁辺部から検出され、調査区全域から縄文時代の土器・石器、弥生土器、古式土師器等の遺物が少量出土した。ここでは、遺構、遺物の順に概略を述べる。

１．遺構

竪穴住居跡、溝状遺構、掘立柱建物跡、土坑、柱穴状遺構、性格不明な遺構の順に概略を述べる。

ＳＢ０１（第３図）　３Ｂ区で検出され、東西約2.8ｍ、南北約2.9ｍの隅丸方形状を呈する。断面は浅い皿状を呈し、炉、柱穴や壁溝等の施設は確認されなかった。北壁寄りの１層中から樫王式の可能性のある土器片が、出土した。

ＳＢ０２（第３図）　２Ｂ・３Ｂ区の調査区端で検出され、北半は切り土によりすでに失われていたが、直径約5.1ｍの円形を呈する住居と推定される。炭化材が散在した状況にあり、焼失家屋の可能性が高い。壁溝は、確認されなかった。柱穴は、位置と規模からＰ１、Ｐ３、Ｐ４が相当すると考えられる。Ｐ３、Ｐ４は近接した位置にあり、建て替えによる可能性がある。柱穴は、壁から70㎝～80㎝ほど離れたところに位置する。柱穴を結んだ線の西寄りに、直径約20㎝、掘り方からの深さ約10㎝の小穴Ｐ２が存在する。Ｐ５は、40㎝×60㎝の規模で掘り方からの深さ約15㎝を測り、貯蔵穴と考えられる。炉は住居の中央西寄りに位置し、粘土が貼られ礫が北端に据えられていた。Ｐ１の西から台石、Ｐ２の南から磨石、東壁寄りから大型剥片が出土した。台石は、31.5㎝×36㎝の三角形状の石で、高さ約18㎝、重さ約30㎏。石の側面、下から約５㎝のところに火災により炭化した物が触れた痕跡が、黒くベルト状に残る。住居の平面形と土器から、弥生時代後期に位置づける。

ＳＢ０３（第４図）　３Ａ・３Ｂ区の調査区端で検出された。北半は切り土により失われ、北西隅は近現代の攪乱を受けている。規模は、東西約４ｍを測る。1層と２層の境が床面と考えられるが、壁溝は確認されなかった。壁から60㎝～70㎝離れて位置するＰ１・Ｐ３が柱穴で、柱穴間は約1.8ｍを測る。柱穴を結んだ線の中央から約40㎝ 壁に寄った位置から、直径約25㎝、掘り方からの深さ約15㎝を測る小穴Ｐ２が検出された。Ｐ４は、35㎝×45㎝、掘り方からの深さ約15㎝を測る小穴で、ＳＢ０２におけるＰ５同様、貯蔵穴と考えられる。遺物は、土器片と打製石斧の破片がある。土器片は、樫王式の可能性がある。

ＳＢ０４（第４図）　４Ｂ・５Ｂ区で検出された住居跡で削平を受け、北東壁も失われているが、一辺約2.6ｍ前後の隅丸方形を呈すると考えられる。柱穴等の施設の検出はなく、出土遺物もない。

ＳＢ０５（第４図）　５Ｂ・５Ｃ区で検出された２つの焼土と、それを囲むように検出された小穴を竪穴住居跡と想定したが、ＳＰ36からは弥生時代後期から古式土師器と考えられる土器破片が、ＳＰ31からは第９図５～８の縄文時代に位置づけられる剥片等が出土している。

ＳＤ０１（第５図）　１Ｂ・２Ｂ区で検出された幅約2.3ｍ、長さ約6.2ｍの溝で、中央から西寄りで第８図－12の高坏が、中央から東寄りで第８図－13の底部穿孔の壺が出土した。西端の一段くぼむ部分は掘り過ぎた可能性が高い。ＳＤ０２・ＳＤ０３などと組み合わさって方形周溝墓となる可能性が

高いが、方台部に相当する部分で埋葬施設は確認されなかった。

ＳＤ０４（第５図）　５Ｂ・６Ｂ区で検出された最大幅約3.9ｍ、長さ約10.2ｍの不整形の遺構で、土層の観察では、ＳＸ０２の上端を切ると判断される。古式土師器の小破片が出土している。

ＳＨ０１（第７図）　７Ｂ区で検出された掘立柱建物跡で、主軸は斜面にほぼ直交する南西方向から北東方向。桁行は２間で、Ｐ２・Ｐ４間で約1.55ｍ、Ｐ４・Ｐ５間で約1.35ｍを測る。梁間は１間で約2.3ｍを測る。柱穴の覆土は、黒褐色土。遺物の出土はないが、他の遺構の時期から、弥生時代後期から古墳時代前期に位置づける。

ＳＫ０１（第６図）　４Ｂ・５Ｂ区で検出された幅約70㎝、長さ約1.8ｍの土坑で、覆土は、淡黄色土がブロック状に混じる黒褐色土である。底面から約10㎝浮いた高さから白磁碗が、底面直上から刃を北に向けた鉄鎌が出土している。

ＳＫ０２（第６図）　６Ｃ区で検出された確認面の幅約80㎝、長さ約1.5ｍの土坑で、底面の幅約40㎝、長さ約1.25ｍを測る。時期不明の土器小片と炭が、少量出土している。

ＳＰ３１（第６図）　５Ｃ区で検出された直径約30㎝の小穴で、暗褐色土を覆土とする。底面から約20㎝の高さから、第９図－５～８が出土した。

ＳＰ６５（第６図）　６Ａ・６Ｂ区に位置し、底面から約10㎝浮いた状態で、第８図－15の土器が出土した。

ＳＰ６６（第６図）　５Ｂ区で検出され、覆土は暗褐色土。底面から約４㎝浮いた状態で第９図－９の砥石が出土した。

ＳＸ０１（第７図）　５Ｃ・６Ｃ区の斜面から検出された南北約2.4ｍ、深さ約10㎝の暗褐色土を覆土とする遺構とその斜面下から検出された焼土であるが、出土遺物はない。

ＳＸ０２（第７図）　６Ａ・６Ｂ区で検出された幅約1.6ｍ、長さ約2.6ｍ、深さ約30㎝を測る遺構で、黒褐色土を覆土とする。ＳＤ０４に上端を切られるが、出土遺物はない。

２．遺物

今回の調査地点では、包含層の残存はほとんどなく、遺物の出土は遺構内からが大半である。その遺構も削平されていて残存状態が悪く、結果として遺物の量はきわめて少量となっている。ここでは、今回の調査で出土した土器類・石器類について、概略を述べる。

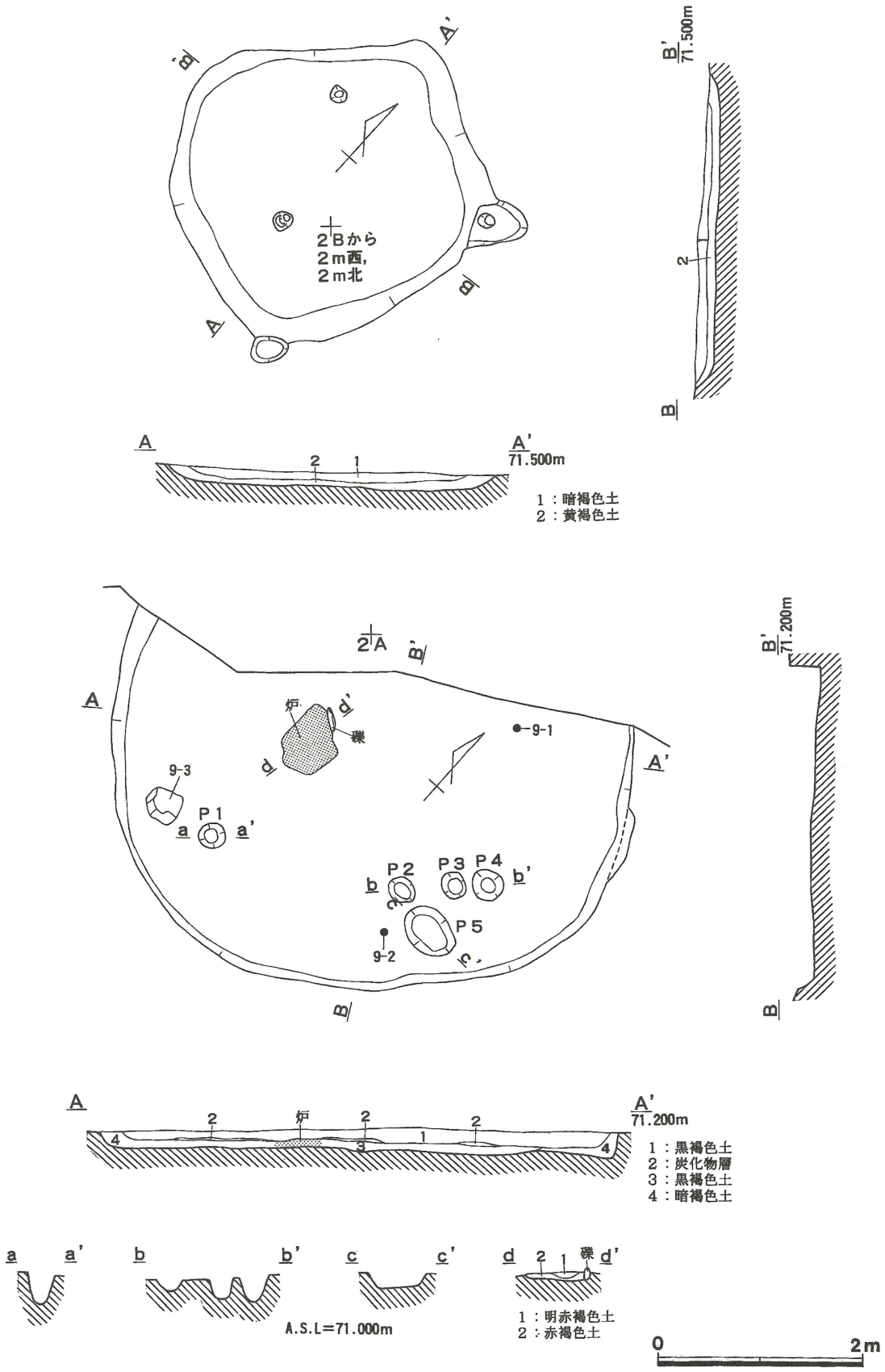
土器類（第８図）

土器類としたものには、土器、陶器、磁器が含まれる。

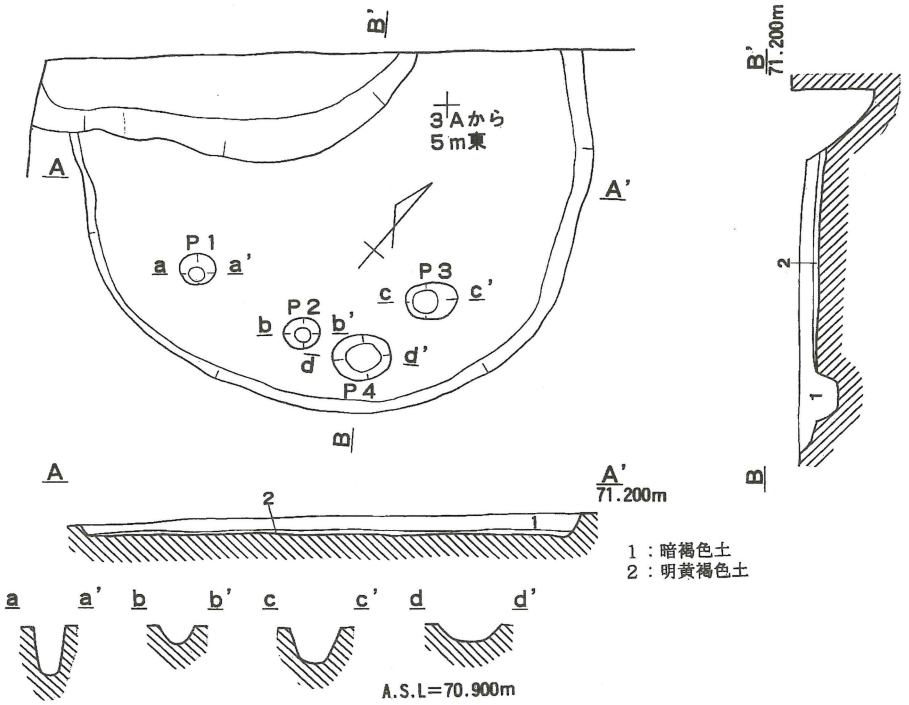
１から３、５から11は、条痕文土器で、樫王式の可能性がある。13は焼成後底部を穿孔した壺で、口縁部に櫛状工具により刻みを、胴部上半には粗い刷毛目を、下半はミガキを施す。外面に赤彩の痕跡がある。14は白磁碗で、胎土に３㎜の石を含む。漬け掛けにより２回施釉され、１回目は内面全体と体部外面の中ほどまで、２回目は、内面全体と口縁部外面に施釉する。16から21は、縄文時代中期中葉に、22・23は、中期後葉に位置づけられる。24・25は古式土師器。26は、14の白磁碗と同じグリッドから出土した無釉の碗の口縁部で、口径から折戸53号窯式の第６段階に位置づけ得る。

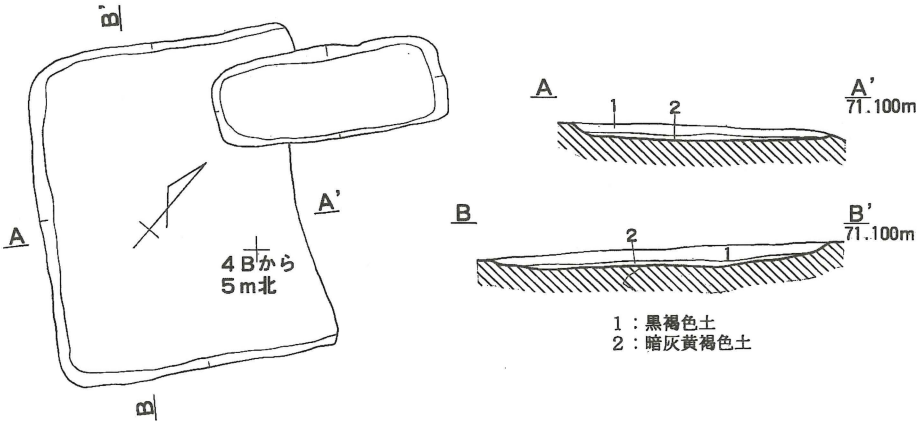
石器類（第９図）

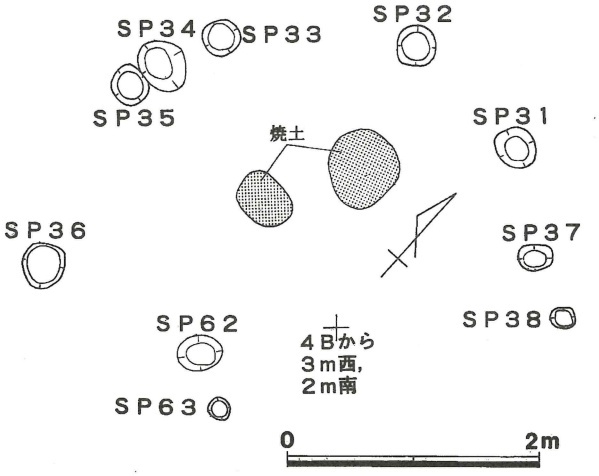
１・６・７・８は大型剥片で、１・８には使用痕が観察される。２の磨石の両端は敲打痕が顕著で、５の礫の片端には軽微な敲打痕が見られる。３の台石は、火災と屋根の倒壊によると考えられる損傷が著しい。９の砥石に残る使用痕は鋭利で、金属器の研磨を推定させる。



第3図 SB01・SB02実測図

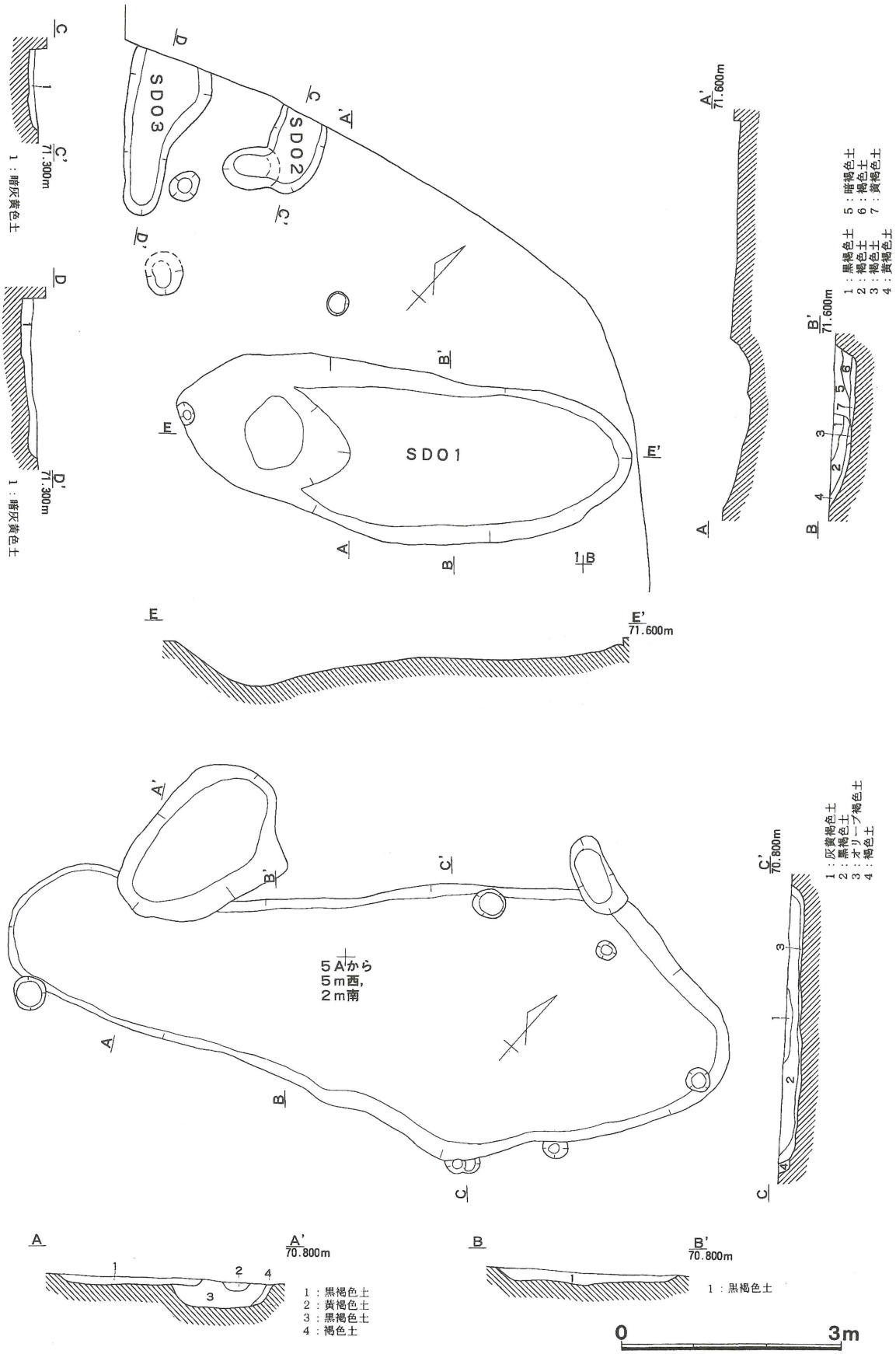




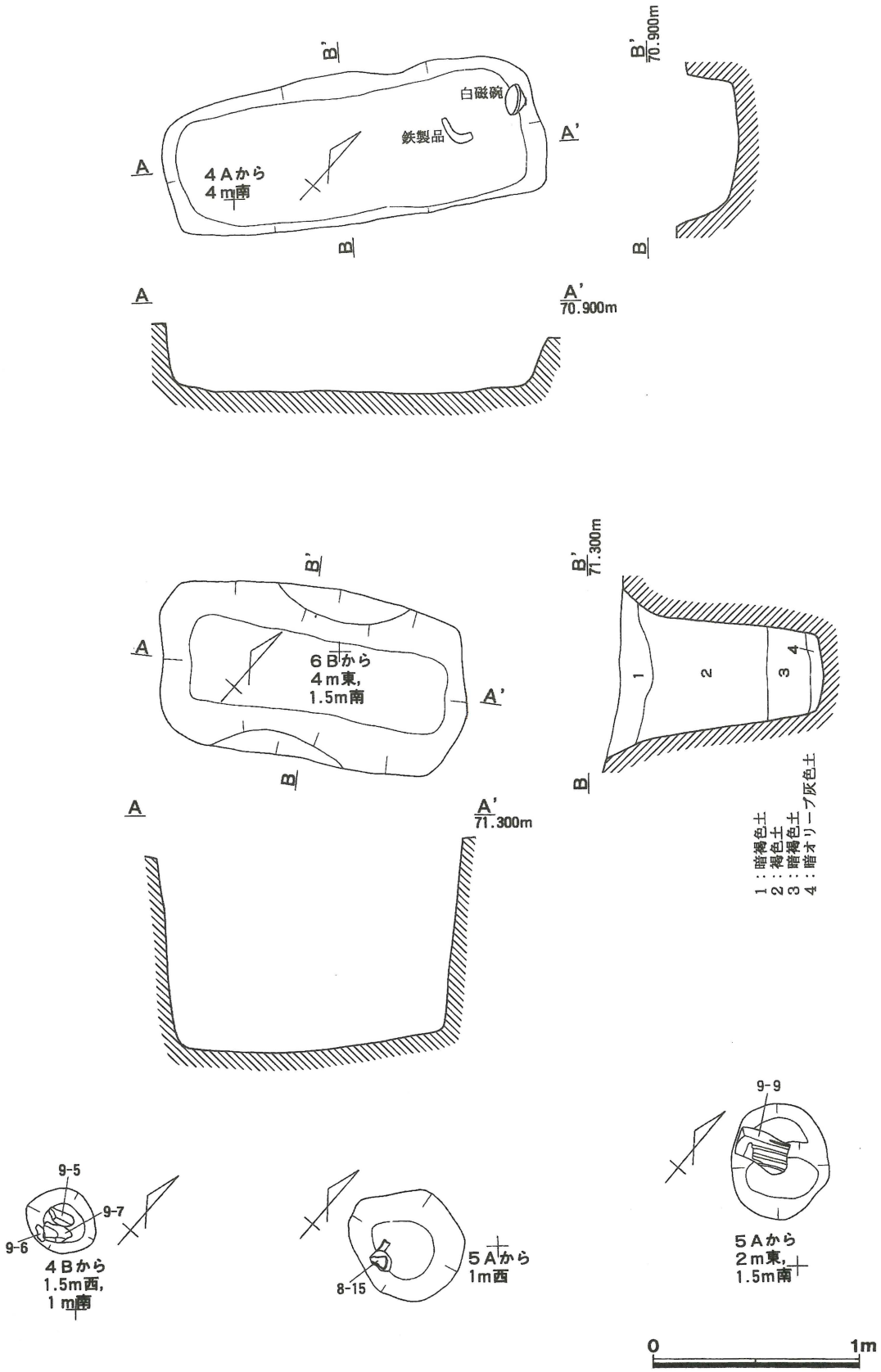


番　　号	上場標高	底面標高	覆　　土
SP63	71.39 m	71.21 m	暗褐色土
SP62	71.36	71.10	暗褐色土
SP36	71.29	71.20	暗褐色土
SP35	71.23	70.94	暗褐色土
SP34	71.23	71.07	暗褐色土
SP33	71.22	71.10	暗褐色土
SP32	71.21	71.08	暗褐色土
SP31	71.28	71.03	暗褐色土
SP37	71.33	71.23	暗褐色土
SP38	71.37	71.30	暗褐色土

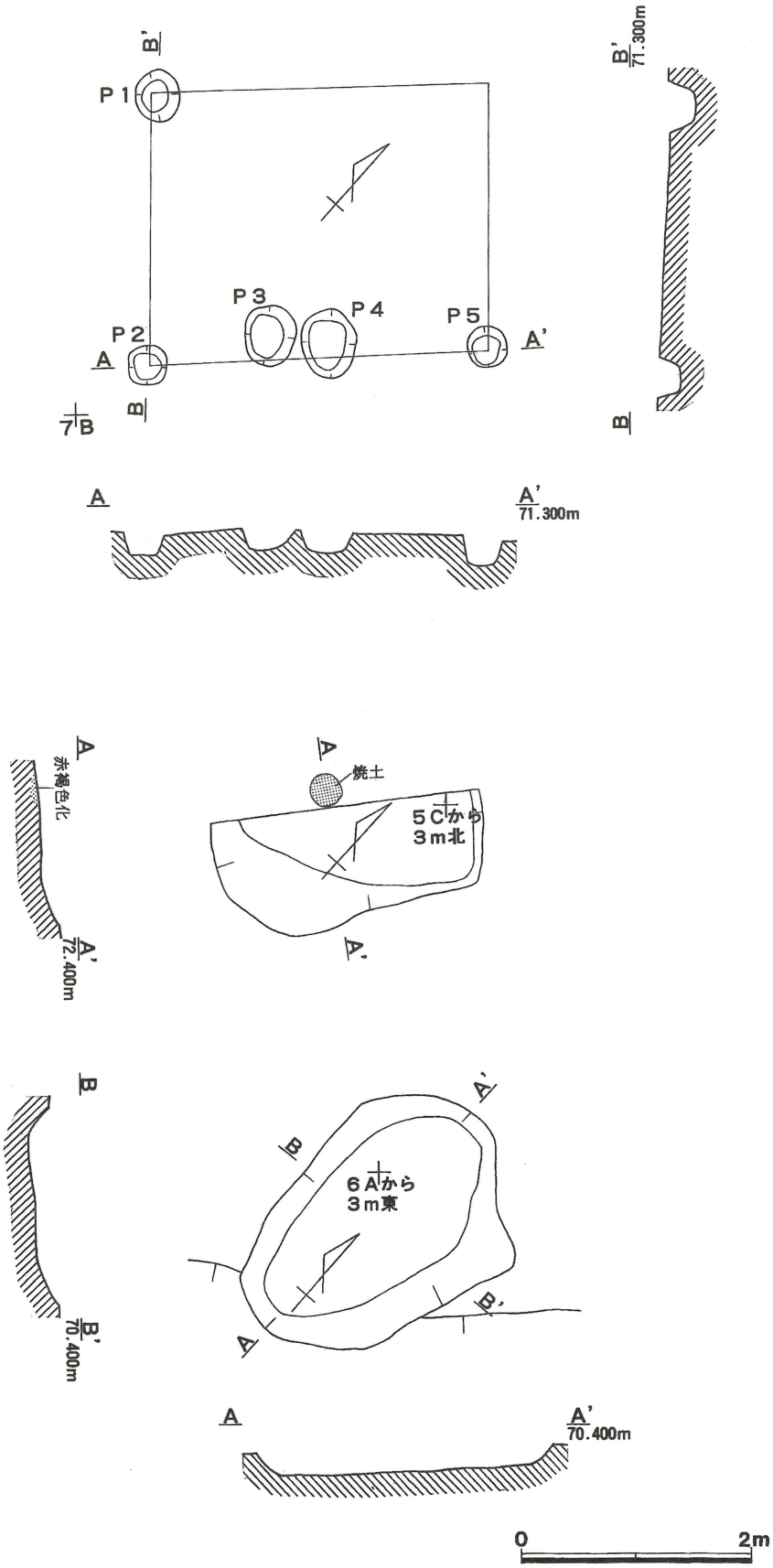
第4図 SB03・SB04・SB05実測図



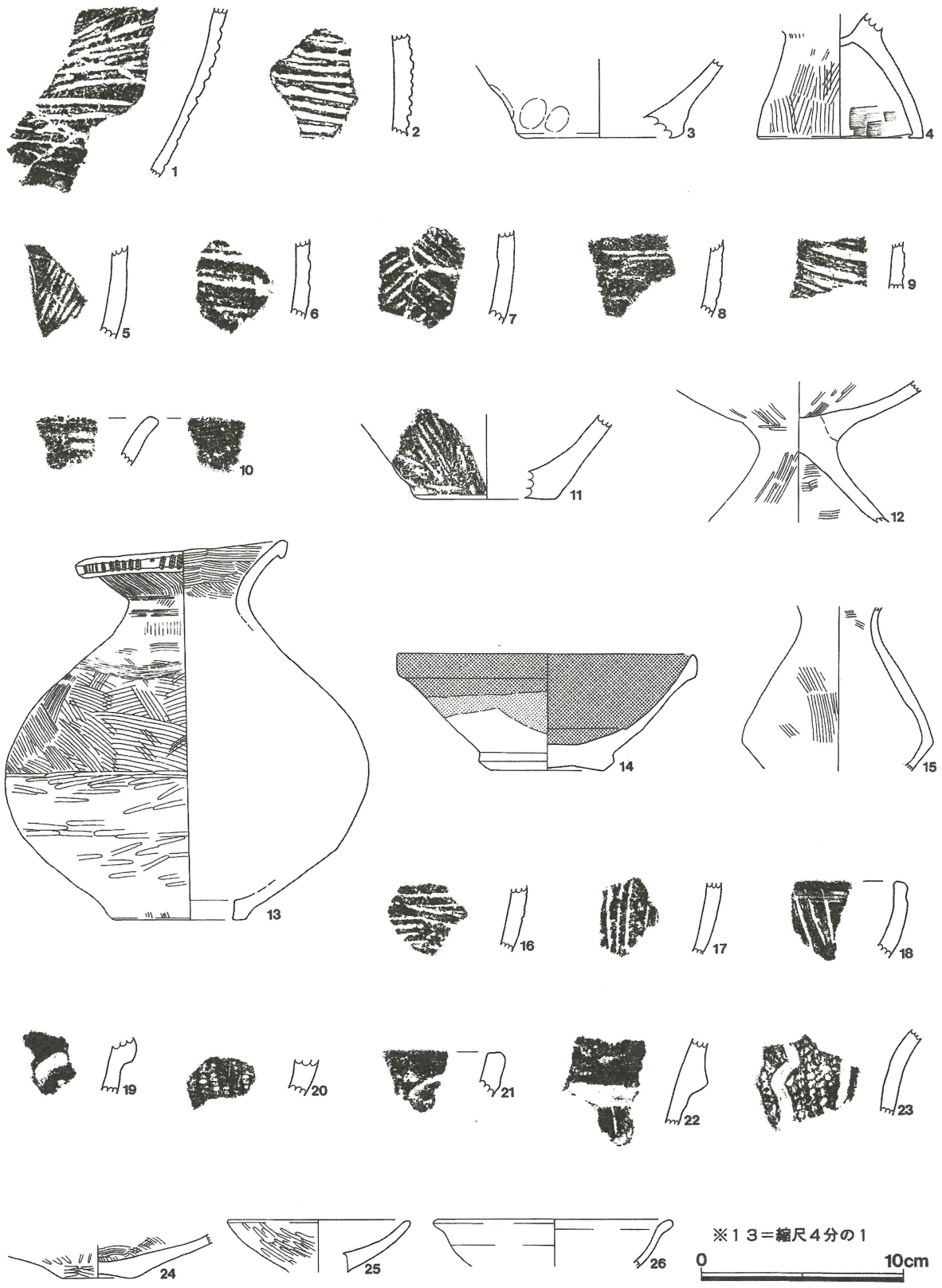
第5図 SD01・SD02・SD03・SD04実測図



第6図 SK01・SK02・SP31・SP65・SP66実測図

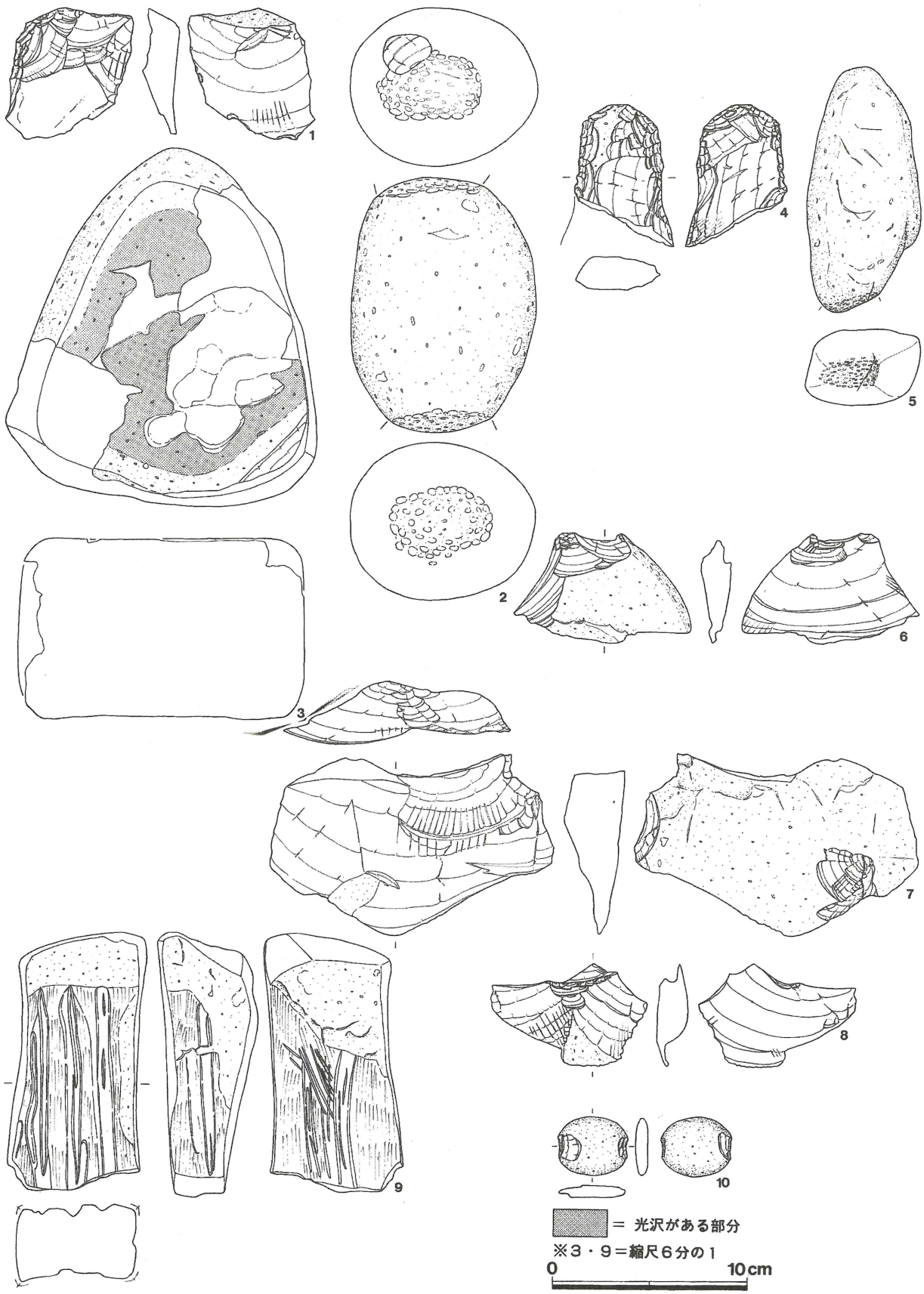


第7図 SH01・SX01・SX02実測図



1～3＝SB01　4＝SB02　5～11＝SB03　12・13＝SD01　14＝SK01　15＝6B区SP65　16・17＝2B区
18＝4B区　19・21・22・23＝6B区　20＝5C区　24＝6A区　25＝5A区　26＝4B区

第8図 出土土器類実測図



1～3＝SB02　4＝SB03　5～8＝5C区SP31　9＝5B区SP66　10＝排土内

第9図 出土石器類実測図

Ⅲ 上川原遺跡 発掘調査と遺跡の概要

１．調査にいたる経緯と調査の目的

上川原遺跡は、市内寺島字上川原に所在する古墳時代後期の遺跡である。この上川原遺跡内で県道大和田森線を改良する計画が、県袋井土木事務所掛川支所から、掛川市教育委員会に示された。そこで、掛川市教育委員会が確認調査を実施した結果、古墳時代前期と平安時代と考えられる埋蔵文化財を確認した。平成11年３月２日に、県袋井土木事務所掛川支所・県教育委員会文化課・市教育委員会文化課が協議し、平成11年度に発掘調査を実施することとなった。

２．調査の方法と経過

上川原遺跡の発掘調査は、道路拡幅部分約100㎡を対象として２面、計218.5㎡を調査した。

現地調査は、水田の水利の関係から、調査区を東西に２分して時期をずらして行った。平面図・調査区壁面の土層断面図を20分の１とし、遺構全体図は西半の調査区と東半の調査区の図面を合成したものであるが、西半の調査の際の基準杭が工事で失われたために、調査区の限界を基に接合した。

写真による記録は、ブロニー白黒フィルム、35㎜カラーフィルム・リバーサルフィルムによった。

以下、作業の経過を概述する。

平成11年７月23日～８月５日　調査区西半の精査・掘削、図面作成・写真撮影

８月23日～８月31日　調査区東半の精査・掘削、図面作成・写真撮影

Ⅳ　調査の内容

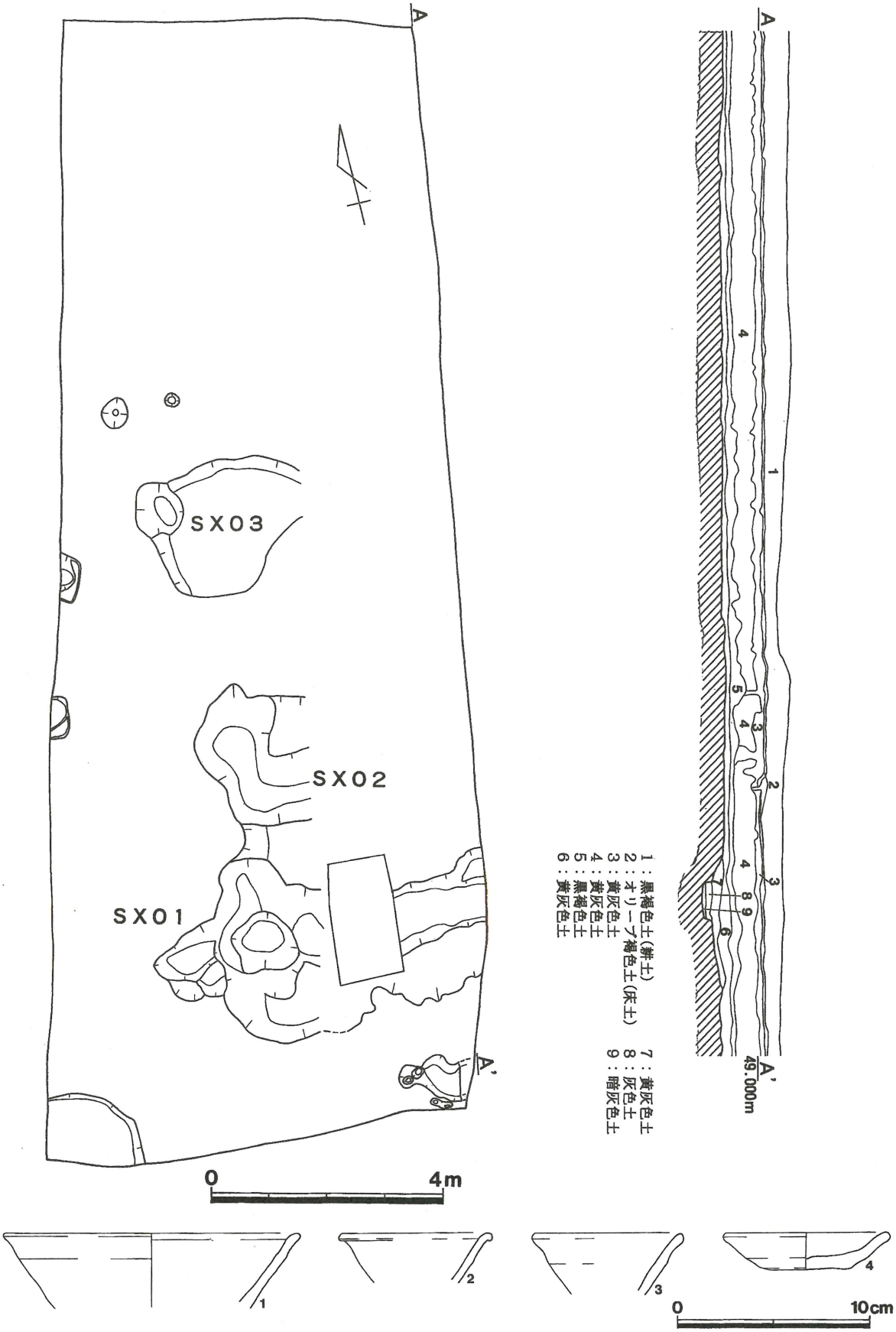
１．遺構と遺物

床土下の３層から、第10図－１～４の山茶碗、小皿が出土した。これらは法量から、13世紀前半に位置づけられる。第10図のＳＸ０１・ＳＸ０２・ＳＸ０３は、暗灰色土を覆土とする不定形な形で、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる土器片が出土している。ＳＸ０１は、覆土中に砂層の堆積が認められることから、水利の可能性があるが、他は遺構と断定できるものではない。

Ⅴ　まとめにかえて

堂山遺跡の発掘調査においては、残念ながら有舌尖頭器に伴う遺構・遺物は確認されなかったが、弥生時代後期と考えられる焼失家屋、古墳時代前期の方形周溝墓、平安時代の土坑墓など市内では初例や発見例の少ない遺構を確認できた。特に白磁碗は、破片での出土例はあるが、完形での出土は市内初である。

上川原遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片や鎌倉時代の陶器片が出土したことにより、今回の調査地周辺で人間の営みがあったことを明らかにできたと考える。



第10図 完掘実測図及び出土遺物実測図

堂山遺跡から出土した炭化材樹種・種実遺体の同定について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

堂山遺跡・高田遺跡・東ノ谷遺跡では、弥生時代後期の火災住居跡が検出されている。このうち、堂山遺跡の SB02 では、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。また、高田遺跡 SB02 から出土した壺内と、堂山遺跡 SB02 および東ノ谷遺跡 SB02 の覆土中からは、種実遺体が検出されている。

本報告では、堂山遺跡 SB02 の炭化材について樹種同定を行い、住居構築材の用材選択に関する資料を得る。また、堂山遺跡・高田遺跡・東ノ谷遺跡から出土した種実遺体の同定を行い、利用された植物の種類および保存時の状況等について検証する。

1．炭化材の樹種

（1）試料

試料は、堂山遺跡 SB02 から出土した炭化材 20 点（試料番号 1 ～ 20）である。

（2）方法

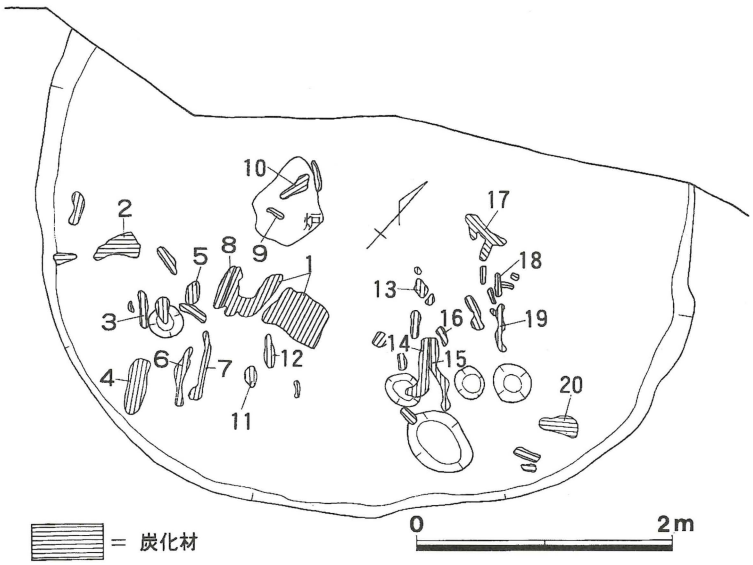
木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（3）結果

樹種同定結果を表１に示す。炭化材は、針葉樹１種類（モミ属）と広葉樹４種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・ツブラジイ・スダジイ・モクレン属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・モミ属（Abies）　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型。放射組織は単列、１～ 20 細胞高。



第1図　堂山遺跡SB02炭化材出土状況図

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～ 20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ツブラジイ（Castanopsis cuspidata（Thunberg）Schottky）　　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～ 20 細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

・スダジイ（Castanopsis cuspidata var. sieboldii（Makino）Nakai）　　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～ 20 細胞高。

・モクレン属（Magnolia）　　モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および２～４個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～ 40 細胞高。

表１　樹種同定結果

遺構	時代	番号	用途	樹種
SB02（竪穴住居跡）	弥生時代後期	1	住居構築材（屋根材？	イネ科タケ亜科
		2	住居構築材	スダジイ
		3	住居構築材（垂木？）	スダジイ
		4	住居構築材（垂木？）	スダジイ
		5	住居構築材（垂木？）	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		6	住居構築材（垂木？）	スダジイ
		7	住居構築材（垂木？）	ツブラジイ
		8	住居構築材（垂木？）	スダジイ
		9	住居構築材（垂木？）	スダジイ
		10	住居構築材（垂木？）	スダジイ
		11	住居構築材（垂木？）	モクレン属
		12	住居構築材（垂木？）	モミ属
		13	住居構築材（垂木？）	スダジイ
		14	住居構築材（垂木？）	モミ属
		15	住居構築材（垂木？）	モミ属
		16	住居構築材（垂木？）	モミ属
		17	住居構築材（垂木？）	モミ属
		18	住居構築材（垂木？）	モミ属
		19	住居構築材（垂木？）	モミ属
		20	住居構築材（垂木？）	モミ属

（４）考察

弥生時代後期の竪穴住居跡から出土した炭化材は、出土状況から住居構築材と考えられる。合計５種類の木材とタケ亜科が認められた。このうち、試料番号１は、住居跡の中央付近で出土しており、タケ亜科に同定された。タケ亜科の材質などを考慮すれば、屋根材の一部が炭化・残存したものと考えられる。その他の炭化材は、住居の中央に向かって倒れた様子を示すものが多く、垂木の可能性がある。モミ属とスダジイが多く見られ、住居構築材がこれらの種類を中心としていたことが推定される。このうち、試料番号 17 ～ 19 の３点と試料番号 15･16 の２点は、それぞれ直線状に出土し、樹種も同じモミ属であることから、同一部材に由来する可能性がある。スダジイについては、強度が高い

材質を有することから、材質を考慮した用材選択が推定される。また、モミ属は、スダジイに比較すると強度は低いが、大径木が得やすく、樹幹や枝が真っ直ぐになるものが多い。このような点が、利用された背景に考えられる。

掛川市内では、東ノ谷遺跡の弥生時代後期の火災住居跡から出土した炭化材にクヌギ節を中心とした種類構成が確認されている（未公表資料）。また、静岡県内では、浜松市中平遺跡で弥生時代後期の住居構築材について樹種同定が行われており、コナラ亜属（クヌギ節・コナラ節）・アカガシ亜属・クリ・スギ等が確認されている（山内，1982）。今回の結果は、構成している種類は異なるが、針葉樹と広葉樹が混在する点で中平遺跡の結果と類似する。

住居構築材の用材選択は、関東地方の調査例から遺跡周辺の植生を反映することが指摘されている（高橋・植木，1994）。この結果から、本遺跡周辺ではコナラ節やモクレン属等の落葉広葉樹、常緑広葉樹のシイノキ属、針葉樹のモミ属等が生育する植生が見られたと考えられる。現在の植生などを考慮すれば、台地上にはシイノキ属やコナラ節、谷沿いにモクレン属、山地斜面等にモミ属が生育していた可能性がある。

本遺跡の結果は、中平遺跡に傾向が類似するが種類構成が異なる。これは、両地域の植生の違いを反映したものと考えられる。また、今回の結果では、市内の東ノ谷遺跡とも種類構成が異なっている。同一地域の異なる遺跡間や同一遺跡内の異なる住居で種類構成が異なる例は、群馬県渋川市の古墳時代～奈良・平安時代の各遺跡の調査結果でも認められており、住居の構造、周辺の局地的な植生、生業等の違いを反映した可能性が指摘されている（橋本ほか，1996）。本遺跡と東ノ谷遺跡の結果の違いについても同様の可能性が指摘できる。

２．種実遺体の種類

（１）試料

試料は、高田遺跡、東ノ谷遺跡、堂山遺跡から検出された種実９点である。いずれも弥生時代後期の焼失家屋から出土したものの一部である。各試料の詳細は、同定結果と共に表２に示す。

（２）分析方法

実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。

（３）結果

結果を表２に示す。試料の中には、種実以外の炭化物や、保存上が悪いために種実であるかの確認ができなかったものがあり、「不能」として表示した。その他の試料は、イネとアカメガシワに同定された。以下に検出された種実の形態的特徴を示す。

表２　種実同定結果

番号	遺跡名	遺構	種類(個数)	備考
1	高田遺跡	SB02	イネ(3)	
2	東ノ谷遺跡	SB02	不能(3)	
3	東ノ谷遺跡	SB02	イネ(1),不能(1)	
4	堂山遺跡	SB02	不能(1)	
5	堂山遺跡	SB02	アカメガシワ(破片)	１個体分
6	堂山遺跡	SB02	アカメガシワ(1),不能(1)	
7	堂山遺跡	SB02	不能(4)	
8	堂山遺跡	SB02	イネ(2)	
9	堂山遺跡	SB02	イネ(3)	

・アカメガシワ（Mallotus japonicus（Thunb.）Mueller-Arg.）トウダイグサ科アカメガシワ属

種子が検出された。大きさは４ mm 程度。黒色でＹ字型の小さな「へそ」があり、表面には小さな瘤状隆起を密布する。種皮は薄く硬い。

・イネ（Oryza sativa L.）　イネ科イネ属

炭化した胚乳が検出された。胚乳は大きさ４ mm 程度。楕円形であるが、胚の痕跡部分が欠けたように見える。表面には数本の筋がみられる。

（4）考察

イネは栽培のために渡来した植物であり、周辺での栽培・利用が考えられる。今回検出されたイネはいずれも炭化していることから、貯蔵されていたものが焼失したものと考えられる。いずれも籾はついておらず脱穀した状態で保存されていたとみられるが、火熱にあうと籾殻からはずれやすくなるため、出土状況や出土した他の炭化米に関して確認する必要がある。

アカメガシワは、林縁部に生える低木であり、現在でも周囲の山野に普通にみられる。炭化していないことから、遺構が埋積する過程で混入した後代のものである可能性が高く、当時の植生に由来しているものかどうかは不明である。

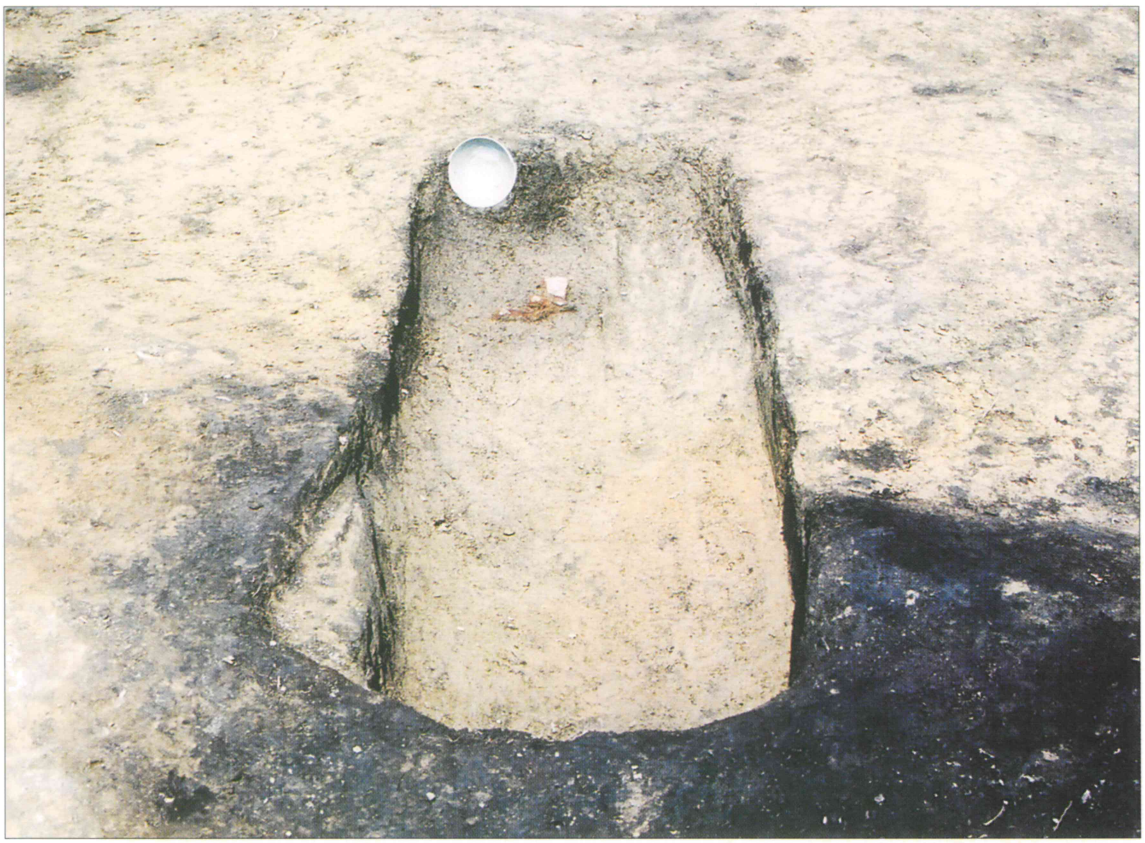
引用文献

・橋本真紀夫・高橋　敦・大塚昌彦（1996）「群馬県榛名山東麓地域における縄文時代から平安時代の住居構築材の用材」『日本文化財科学会第 13 回大会研究発表要旨集』p.92-93.
・高橋　敦・植木真吾（1994）「樹種同定からみた住居構築材の用材選択」PALYNO，2，p.5-18，パリノ・サーヴェイ株式会社.
・山内　文（1982）「中平遺跡出土炭化材・木材の樹種同定」『西鴨江　中平遺跡』，p.290-291，　浜松市教育委員会.

図　　版

図版Ⅰ

堂山遺跡全景



SK01遺物出土状況（西から）

図版Ⅱ

SD01出土古式土師器壺

SK01出土白磁碗

図版Ⅲ

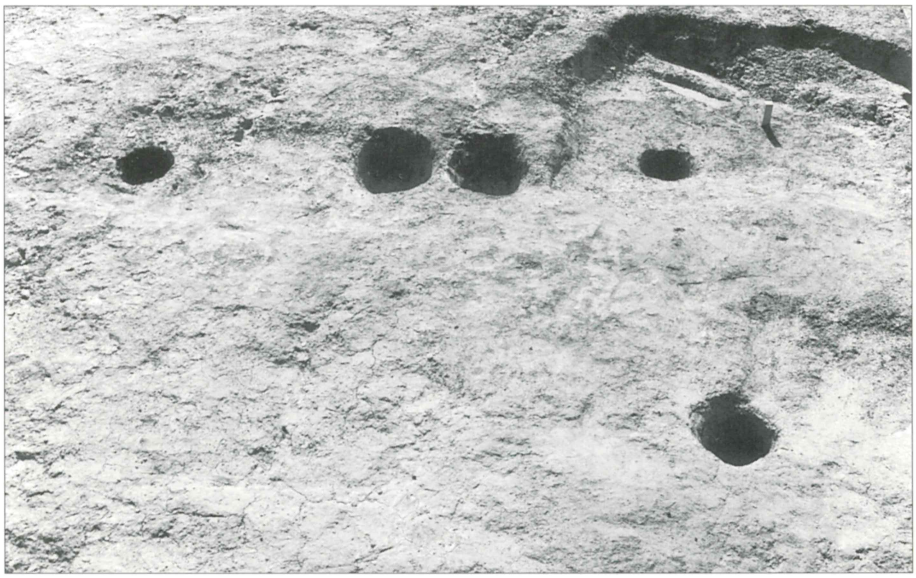
SB01全景
（西から）

SB02全景
（南から）

SB03全景
（南から）

図版Ⅳ

SD01～03全景
（西から）

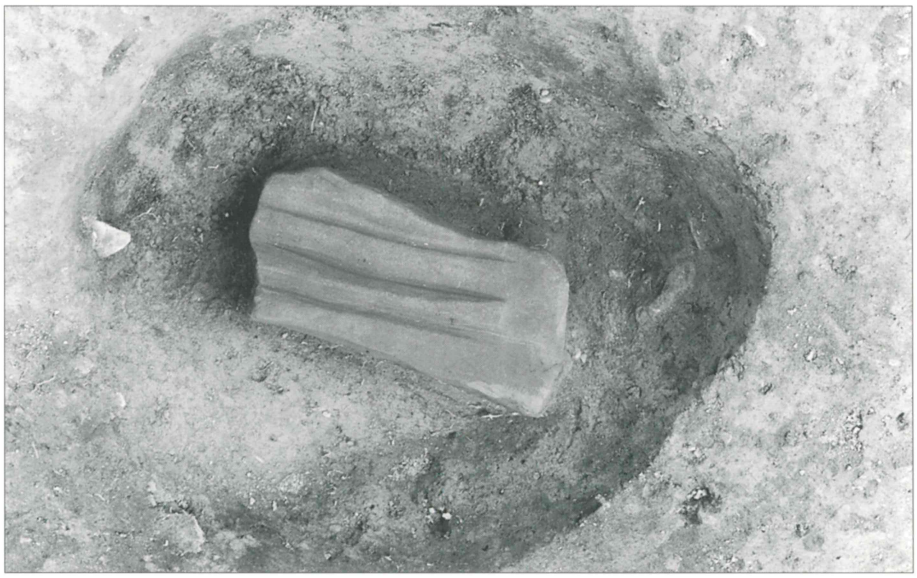


SH01全景
（北から）

SK01検出状況
（東から）

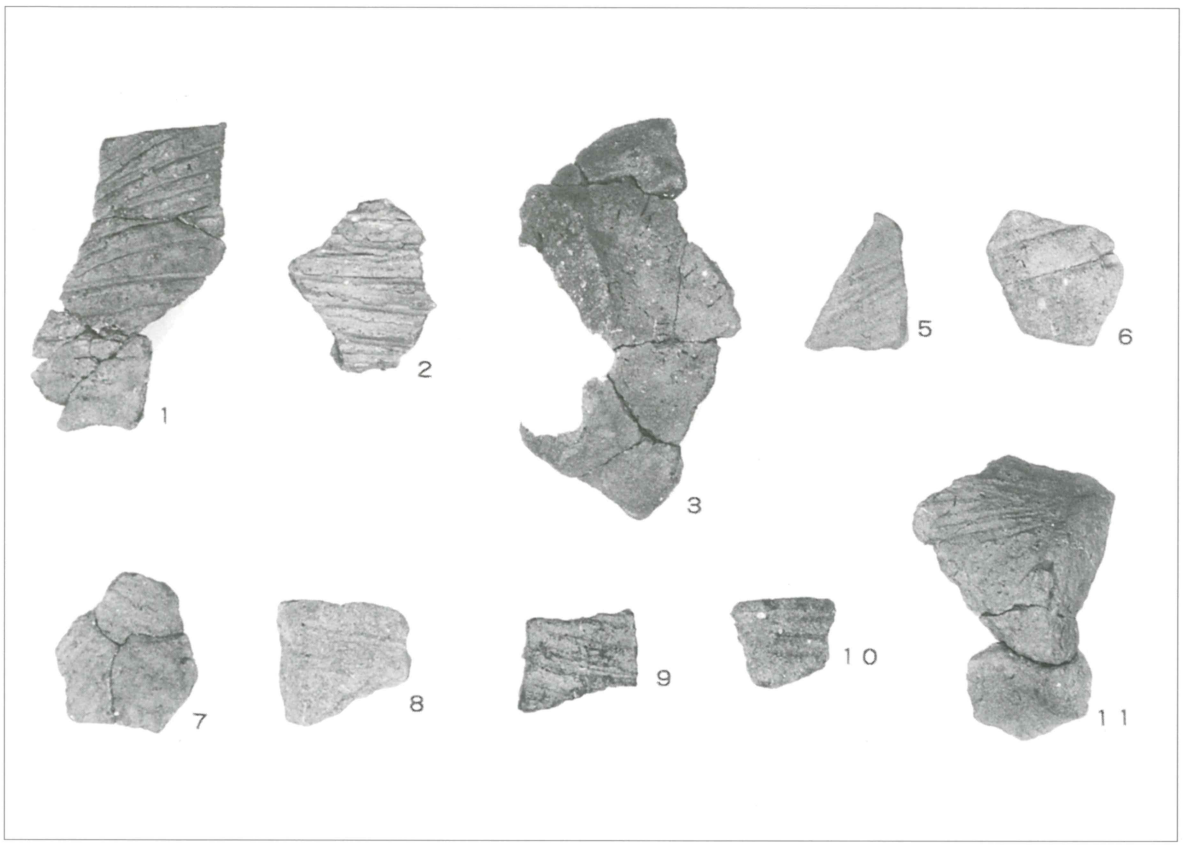
SK02全景
（東から）

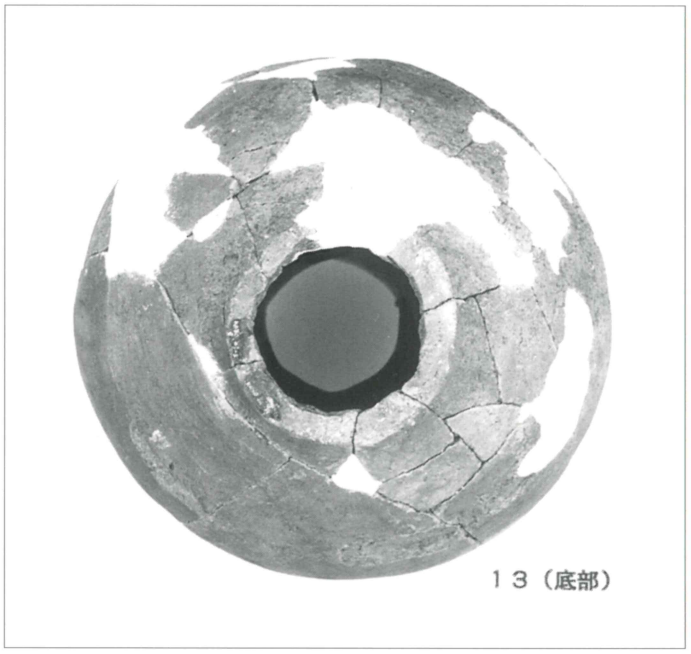
SP31石器出土状況
（北から）



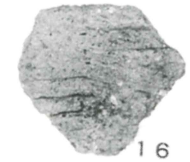
SP66砥石出土状況
（北から）

図版Ⅵ



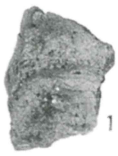


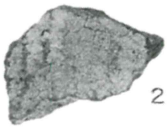
図版Ⅶ


16

17

18


19


20

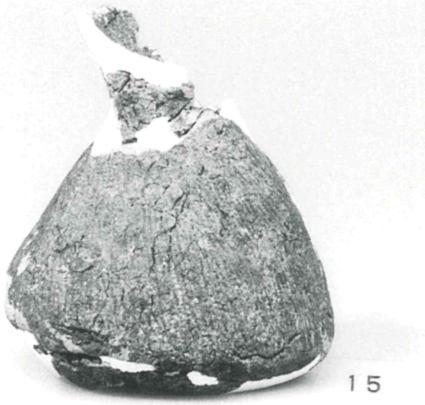
21

22

23

14（内面）

14（外面）

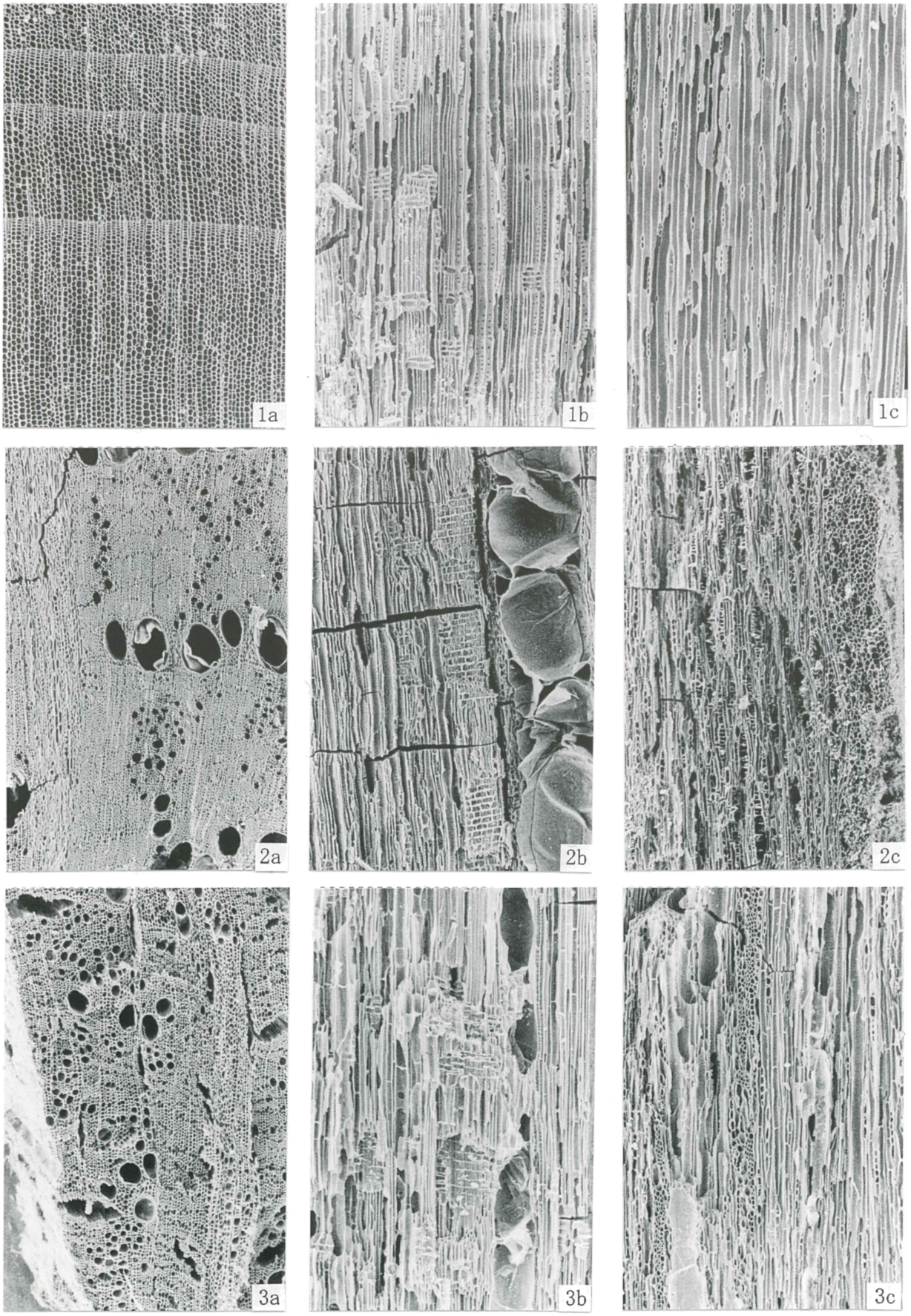

15

26

4Ｂ区出土灰釉瓶破片

図版Ⅷ

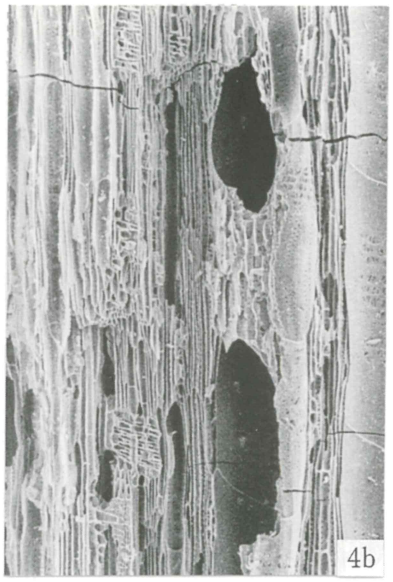
図版Ⅸ

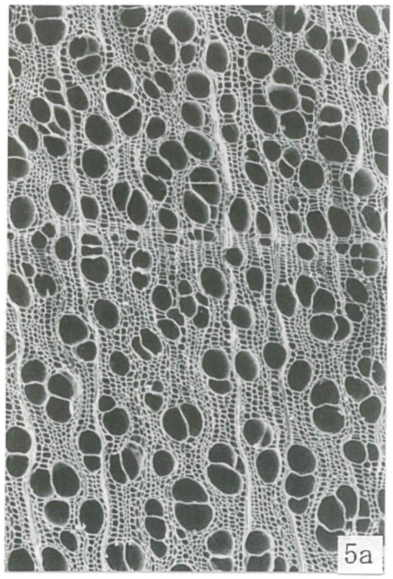


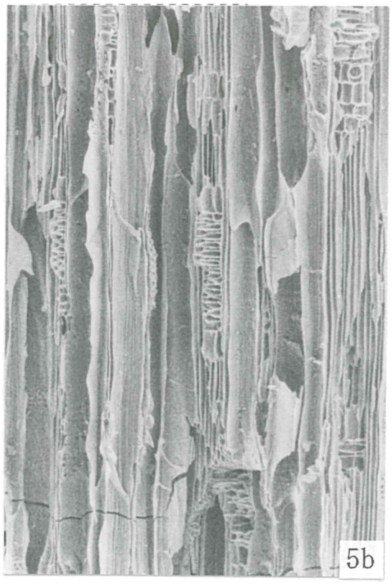
1. モミ属（SB02 No. 19）
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節（SB02 No. 5）
3. ツブラジイ（SB02 No. 7）
   a：木口，b：柾目，c：板目

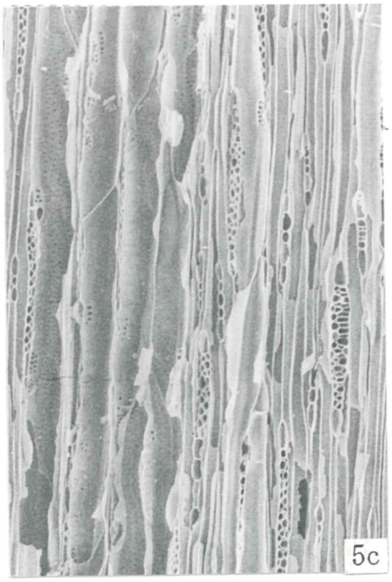
200μm：a
200μm：b, c

図版X







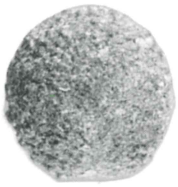


200 μm:4, 5a
200 μm:4, 5b, c
1mm :6-9

6

7

8


9

4. スダジイ（SB02 No. 2）　a：木口，b：柾目，c：板目
5. モクレン属（SB02 No. 11）　a：木口，b：柾目，c：板目
6-8. イネ（試料番号1）
9. アカメガシワ（試料番号6）

報　告　書　抄　録

ふりがな	どうやまいせき・かみかわらいせき
書名	堂山遺跡・上川原遺跡
副書名	県道大和田森線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書
編集者名	前田庄一
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436-8650　掛川市長谷701-1
発行年月日	平成13年３月15日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
どうやまいせき 堂山遺跡	しずおかけんかけがわし 静岡県掛川市 はらさと 原里1688-4外	22213	430	34度 46分	135度 58分	19990714 20010315	1,644㎡	道路改良工事
かみかわらいせき 上川原遺跡	しずおかけんかけがわし 静岡県掛川市 てらしま 寺島1197		424	29秒	08秒		218.5㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂山遺跡	集落	縄文・弥生・古墳・平安	竪穴住居跡・方形周溝墓・土坑墓	縄文土器・古式土師器・白磁	
上川原遺跡	集落	弥生・古墳・鎌倉		山茶碗	

堂山遺跡・上川原遺跡
県道大和田森線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書

平成13年３月15日

掛川市教育委員会
編集発行　静岡県掛川市長谷701-1
ＴＥＬ（0537)21-1158

株式会社アビサレ
印　刷　静岡県掛川市領家864-1
ＴＥＬ（0537)24-2301